

五無齋・保科百助先生にも、振り子の
振幅の大きさを感じ、無条件の尊敬の念
を抱いています。先生の言動には、私利
私欲にとらわれず、常に「民に施して、
衆を救う」という使命感と、自分の感情
に忠実でありたいという自己忠誠の意
識と同時に、「五無齋」の姿勢が貫かれ
ているからです。

このような姿勢に、先生の凄さと魅力
を感じる人は少なくありません。末尾の
参考図書をはじめ、先生の人となりと業
績を語るおびただしい著述の数が、それ
をつぶさに物語っています。

以下、振り子が謹厳な教師の対極点ま
で振れたかのような、先生の痛快なエピ
ソードをご紹介します。

公的な儀式に押しかけ、主催者の肝を
冷やすような演説を幾たびか敢行。明治
42年、母校・長野師範学校の卒業式では、
知事の訓示や校長の告示などの後、知事
と校長の弁を酷評。

「滑稽の積りにて自分の急所をつかれ
た時」や「上手な人に先へ演説されたる
時」「初めて筆屋になりたる時」など、
「当世百迷惑」を50まで列挙し、「以下
は読者各位のうちにて願ひたし」と。

長野師範時代、横浜禁酒会員になり、
会の雑誌を購読。初任教・飯山小学校で
も、酒席で一滴も口にしなかったが、後
年、「五無齋は酒も煙草も止めぬ積りな
り」の一文を残す酒豪に変貌。

「夕方、酔われると、そのまま縁側へ
大の字になり寝転んで、泰然と大駟をた
てておられました。場合によると、二階
の手摺より往来に向かつて放尿三千尺と
いう状態でした。」と保科塾生。

「信濃公論」にて、五無齋の新案国語
教授法によって、専心一意、児童教育に
当たらなければ、各児童がこれを理解し、
記憶し、応用することができないのは、
「屁」を見るよりも明らか、と。

友人の松本女子師範学校長から、風
教（風俗と教化）に害があると出版協力
を拒まれた狂歌集「よいかゝをほしな百
首け」には、豪快なユーモアや痛烈な風
刺よりも、むしろ哀愁と孤独感、慈愛に
満ちているのではないか。

その一首、「両親の位牌を見ては思ふ
かな線香立つるかゝをほしなと」。

6月7日は、保科百助先生の命日です。
その日の夕刻、津金寺を訪れ、境内に建
つ保科百助先生の記念碑の前で、書物で

知る先生の在りし日を偲びました。

すると、ふと、先生が北佐久教育会の
席上で詠んだという狂歌が、頭をよぎり
ました。「駄馬野馬馬車馬多き世の中に
我は千里の馬にぞありける」

先生の凄さと魅力にひたりながら、仙
台石の巨碑に刻まれた雄渾な文字をよく
よく見ますと、「科」の二画目に小さな
蜂の巣が下がっていました。
それは、振り子のようでした。

〈参考図書〉

- 「五無齋保科百助全集」佐久教育会編
- 「詩伝・保科五無齋」三石勝五郎著
- 「保科五無齋石の狩人」井出孫六著
- 「野人教育家・保科百助の生涯 五無齋と信州教育」平沢信康著
- 「にぎりぎん式教育論上・下」須藤實著
- 「私を変えた源流」中山英一著
- 「あけぼの」長野県同和教育推進協議会編
- 「三石勝五郎全詩集」三石勝五郎翁を語る会編
- 「五無齋保科百助評伝」佐久教育会編

✿挿絵について✿

今冬の「広報たてしな2月号」から、
シリーズ「一緒に考えましょう！」のた
めに、毎号、素晴らしい挿絵をお寄せい
ただいております。

老生の心許ない思いを一枚の絵で見事
に表現された、メッセージ性豊かな挿絵
は、立科中学校美術科・柳澤由佳先生の
作品です。

柳澤先生は、東京芸術大学美術学部絵
画科（日本画専攻）を卒業され、現在、
ご自身の制作活動は休止し、日々、中
生の美術教育に全身全霊で取り組んでお
られます。

先生におかれましては、このようなお
忙しさの中で、日頃から子どもを温かい
まなざしで見つめ、毎月、心温まる挿絵
を描いてくださっておりますことに、心
より謝意と敬意を表します。

本シリーズをご愛読いただいております
皆様には、柳澤先生の挿絵をこれから
も、ぜひお楽しみいただきたいと思います
です。

相談時間等

月・水・金曜日

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館/
午前11時40分～午後1時30分
電話 56-0303 (直通)
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の
教頭先生へご連絡をお願いします。